

女子学生の職業選択

上原 真理子

Carrier choice by girl students

Mariko UEHARA

要旨

本学（帝京短期大学）で、養護教諭または栄養士のいずれかをコースとして選んだ女子学生約150人を対象に、職業の志望時期とその動機、母娘の関係や人生観、職業観についてアンケートによる調査を実施した。栄養士コースの学生は母との関係が密で、外向的、現実的で生命力が旺盛であり、仕事内容から職業を選び、職業意識が高い傾向がある。養護教諭コースの学生達は内省的であって、生きる意味を見出しにくく、社会性が乏しく、母との関係はやや弱い傾向がある。これらの要素が養護教諭コース学生の志望動機になっている可能性もある。養護教諭コースの学生は、世話になった養護教諭への憧れから早期に志望したものが多く、また志望度の平均は一貫して高く、読書傾向は旺盛である。このようなコース別の傾向の違いを優劣としてとらえるべきではなく、個性として捉え、個別にきめ細かく対応し教育することが必要と考える。

Summary

For about 150 girl students who chose either of a school nurse or a dietician as a course in Teikyo junior college, I carried out investigation by questionnaires about the choice time and the motive of an profession, relation between mother and daughter, and view of life, outlook on occupation. Students of a dietician course are not only extrovert and realistic, but also full of vitality. They choose a profession among work contents. Their occupational consciousness tends to be high and their relation with mother are dense. Students of a school nurse course introspect and are hard to find a meaning to live, and social nature is poor, and relation with mother tends to be slightly weak. These elements may become a desired motive of students of school nurse course choice. Many students of a school nurse course wished early to join from admiration to the school nurse, who was ever taken care of. In addition, average of a desired degree is high with a school nurse course student throughout. Their reading tendencies are high too in a school nurse course. I think that we should not catch a difference of a tendency according to such a course as the superiority and inferiority. We should catch so these properties as their personality and educate them individually.

はじめに

国際婦人年の1975年は戦後30年の節目であった。さらにそれから30年の歳月が流れ、戦後60年の2005年を迎えている。この間、女子高等教育は、良妻賢母型の家政学科から、自然科学の発展の一翼を担うべく、生活科学科へと名称が変えられていった。現在女子高等教育は、広く職業人として活躍する生活人を育てるため、資格取得を目指す職業教育としての性格が強くなっており、女子学生の職業環境は、かつてないほど恵まれているようにみえる。

現在の女子学生の祖母達は、戦争という時代の波に翻弄されつつも、家庭婦人として、あるいは銃後の職業婦人の草分けとして、逞しく生きてきた。女子学生の母達は、平和な時代に生まれ、原則としては自由に学問と職業を選択できるようになった。さらに、その母から娘へと引き継がれて、女性の職業意識はどう変わったのだろうか。果たして進歩したのだろうか。現実に2年制の短大で女子教育に携わる中で、この問いは常に筆者の頭にある。本研究では、本学の養護教諭志望（養護コース）と栄養士志望（栄養コース）の女子学生を対象に調査することで、現状の一端を把握しよ

うと試みた。

一般的に女子の職業の中で、養護教諭と栄養士はどのような位置付けられているだろうか。歴史を紐解くと、昭和初期、高等教育を受けた女子の8割は、教員養成課程であった。その後、女性の社会進出に伴い業種が広がる中で、看護は特に専門職として広く確立されてきた。こうした歴史の中で、始め学校看護婦として始まった養護教諭は、現在は両義的性格以上のものを求められ、仕事内容も複雑多岐に亘り教育課題は多い。一方栄養士も現在、老人施設や病院において、パラメディカルスタッフとして重要な役割を担うばかりでなく、栄養教諭としても食育を担うようになった。これらの職種は近年になって確立され、女性の進出が著しい分野である。特に最近では、こども達のこころとからだを守るという観点から、時代の要請と期待を一身に受けており、若い女性達に人気のある職種である。しかし入学後に悩み、途中で進路変更するものも多い。彼女達は、いつ、どこで、何に、なぜ、つまずいて、どうしようとしているのか、その実態を掴み、何が問題なのか分析する必要がある。本論文では、入学時の志望時期、動機、入学後の志望変化の実態とその理由、読書傾向、職業意識に影響を及ぼす要因と人間関係、特に母との関係、人生観、職業観などについて、栄養・養護コースの学生全員を対象に調査した結果をまとめ考察する。この調査結果が日常の教育、学生指導にも生かされることを目指すものである。

調査方法

本学（帝京短期大学）のキャンパスで養護教諭、栄養士を目指す2年制女子学生（以下、養護コース、栄養コースとする）を中心に授業中アンケートを実施した。調査時期は2004年10-11月（1年後期）で、方法は記名式で自由記述を主として採用した。当該内容説明後にアンケートし、肯定か否定か問う場合は、肯定は1、否定は0、どちらともいえない場合は0.5として集計した。

結果と考察

1) 職業志望の時期・動機・影響

職業志望の時期（表1）については、栄養・養護両コース共に、高校時代とする学生が最も多く両コース合計で全体の62%であり、中学校13%、小学校4%の順となった。養護コースでは、栄養コースの学生より志望時期が早く、小学校というものが8%あった。また高校の時期の内訳では、栄養コースでは3年次に決めたものが最も多いが、養護コースでは2年次と3年

表1 志望時期

	養護	100%	栄養	100%	計	100%
対象数	72		77		150	
志望時期						
I 小学校	6	8%	0	0%	6	4%
II 中学校	11	15%	8	10%	19	13%
III 高校	40	56%	53	69%	93	62%
計	57	79%	61	79%	118	79%
III 高校内訳						
1年	6	8%	7	9%	13	9%
2年	12	17%	16	21%	28	19%
3年	12	17%	25	32%	37	25%
1-3年	10	14%	5	6%	15	10%
小計	40	56%	53	69%	93	62%

次が同数あり、時期が早い傾向があった。志望動機（表2-1）については、A人の影響、B自分の傾向、C安定性、D第一志望に近い、としてA-Dの4種に分類した。養護コースの学生では、A「人の影響」によるものが最も多く、72人中31人で43%、その殆どは養護教諭への憧憬からであり、（詳細は表2-2）二番目に多かったのが、B「自分の傾向」のうち「子供好きや世話好きな性格」からで11%あった。栄養コースの学生では、A「人の影響」は殆どなく、B「自分の傾向」のうち「仕事内容（事柄への興味）」によるものが77人中12人で16%と最も多く、これは全て「食への興味」からであった。次に「職場への興味」からが12%、C「資格など安定性」を求めてというものが8%であった。養護コースの学生では、職場への興味や安定性志向のような傾向は見られず、両コースの対比が際立っていた。

次に前述のA「人の影響」（表2-1 A）について、

表2-1 志望動機

	養護	100%	栄養	100%	計	100%
調査人数	72		77		149	
A 人の影響						
1 養護への憧憬	29		0		29	
2 母が養護	2		0		2	
3 身内が養護	0		2		2	
A 計	31	43%	2	3%	33	22%
B 自分の傾向						
1 性格						
子ども好き	6		0		6	
世話好き	2		0		2	
B 小計	8	11%	0	0%	8	5%
2 事柄への興味						
教育が好き	3		0		3	
保健が好き	1		0		1	
食に興味	0		12		12	
B 小計	4	6%	12	16%	16	11%
3 職場への興味						
学校が好き	1		0		1	
給食	0		5		5	
病院	0		2		2	
老人施設	0		2		2	
C 小計	1	1%	9	12%	10	7%
B 計	13	18%	21	28%	34	23%
C 安定性						
1 資格が取れる	0		4		4	
2 一生女性の職業	0		2		2	
C 計	0	0%	6	8%	6	4%
D 第一志望に近い						
1 看護師	3		0		3	
2 教員	1		0		1	
D 計	4	6%	0	0%	4	3%

表2-2 職業選択に影響を受けた人

影響を受けた人	時期など	養護 栄養 計		
		人数	77	73
1 養護教諭	小学校	5	0	5
	中学校	12	0	12
	高校	7	0	7
	他	3	0	3
	母が養護	1	0	1
2 その他の教諭	中学校	1	0	1
	高校	1	1	2
3 友人	高校	1	0	1
	他	1	0	1
4 他	小学校	1	0	1
	中学校	1	0	1
	高校	1	2	3
5 部活	高校	1	1	2
6 他		5	4	9
7 家族		0	6	6
計		41	14	55

*表2の詳細で、別のアンケートで行なった。

さらに改めて詳しく尋ねたところ、表2-2のように、養護コースでは、職業選択に人の影響を受けたとする学生は77人中41人で53%となり、表2-1よりやや増加した。その中で養護教諭をあげたものは、人の影響を受けた41人中の7割、28人であった。内訳は中学時が最多で12人、次が高校時7人、小学校時も5人あり、その他にも学校での対人関係に影響を受けたものが殆どであった。それに対して栄養コースでは、誰かに影響を受けた者が少なく73人中2割、14人のみで、その中では「家族」とする者が6人で、半数近く、最多であった。

2) 志望度とその変化

次に個々の学生が、志望職業にどの程度の強さで望んでいるか、入学時とその後の変化を調べるため、入学時(4月)と本調査時(10月—入学後半年経過)における志望の強さを、本人に%で表現させた。以下本論文では、この値を志望度と記述する。全体の傾向をみるために、入学時における個々の志望度のコース別平均を求めると、養護コースでは83%に対し、栄養コースでは56%と低かった(表3-1)。入学後半年経過時の平均志望度は、養護・栄養の各コースで、それぞれ65%と38%で、各コース共入学時からの減少分は18%であった。中には志望がより強くなったという学生もいるが、多くは減少の方である。さらに「志望度が変化した(特に減少した)理由」と、「今後自身がなすべきことについてどう考えているか」を尋ねてみたが、それについての回答率から見ると、養護コースの学生の方が良く考えているように思われる。また

表3-1 志望変化

対象数	養護		栄養	
	77	73	73	73
A 入学時志望平均	83%	56%		
B 半年後の志望平均	65%	38%		
A-B 志望減少	18%	18%		
対象数	77	100%	73	100%
以下の問いへの回答人数				
1 志望変化の理由	55	71%	25	34%
2 今後どうしたら良いか	29	36%	2	3%
3 最近読んで良かった本	44	57%	20	27%
4 今後読みたい本	27	34%	26	36%
5 最近印象深いこと	22	27%	7	10%

表3-2 志望減少の理由

対象者数 理由	養護		栄養		合計
	77 人数	73	73	150	
1 現実知り無理と	14	35%	9	47%	23
2 成れるか不安	8	20%	5	26%	13
3 向いているか解らない	4	10%	1	5%	5
4 学多すぎ不安	6	15%	1	5%	7
5 授業が少なく不安	3	8%	0	0%	3
6 他に興味	5	13%	3	16%	8
計	40	100%	19	100%	59

「最近読んで良かった本」や、「印象深いこと」、についての回答率から見ると、養護コースの学生のほうが、本を良く読み(本の詳細は後述、表4)、感受性が高いように思われる(表3-1)。

志望減少の理由(表3-2)としては、多い順に見ると、1位の「1. 今まで現実を知らなかったが、今現実を知りとても無理だと思った」は志望減少者の4-5割で2位の「2. 成れるか不安」は2-3割であった。これについては、養護教諭は教員採用の中で特に高い倍率で、栄養コースの学生の場合と事情が異なることは考慮すべきである。「2. 成れるか不安」と「3. 向いているかわからない」を合計すると両コース共に3割となる。3位の「6. 別の事に興味が出た」というのは両コース共に1-2割であり、これら上位3位までの理由については養護、栄養の両コースで、ほぼ共通の傾向にあるといえる。人間の心理として普遍的な傾向なのか興味深いところである。コースで傾向が異なるのは、項目4と5の「学びに関する不安」であって、栄養コースの学生では1名に過ぎないが、養護コースでは9名で20%を超えているのが注目すべき問題である。しかもその内訳は「4. 学ぶ内容が多すぎて不安」とする者が15%で、逆に「5. 授業が少なすぎて不安」とするものが8%である。これは学生の学力に、差が大きいことが影響していると思われる。

表4 最近読んだ本／読みたい本

A		*A		養護		栄養		計	
学内順位	全国順位	対象者数	書名	著者名	77	73	150		
		No.			読者数	*A	*A	*A	*A
A 2人以上が読んだ/読みたい本									
1	2*	1	世界の中心で愛をさけぶ	片山恭一	8	8	3	3	11
2		2	itと呼ばれた子	デイヴ・ペルザー	7		1		8
3	3*	3	ハリー・ポッター	J・K・ローリング	3	3	3	3	6
4	8*	4	いま、会いにゆきます	市川拓司	3	3	2	2	5
5		5	夜回り先生	水谷 修	3		0		3
5		6	Deep love	Yoshi	3		0		3
5	4*	7	グッドラック	A・ロビラ、F・トリアス・デ・ベス	2	2	1	1	3
5	1*	8	バカの壁	養老孟司	0	0	3	3	3
6	11*	9	きっぱり	上大岡トメ	0	0	2	2	2
6		10	村上春樹の本	村上春樹	0		2		2
6		11	自閉症の本		2		0		2
A 計					31	16	17	14	48
B その他の本					30		16		46
合計 A+B					61		33		94

*A: 全国のベストセラー

A: 読んだ人数が2人以上の本
B: 読んだ人数が1人の本

*A:*Aのみの合計

3) 読書傾向

次に表4は両コースの学生の読書傾向を示したものである。Aの学内順位は両コース合計で複数の学生が、最近読んだか、もしくは読みたいと思った本(A)として挙げた書名を、人数の多い順からリストアップしたものである。コース毎にそれぞれの本の読者数(潜在的なものも含む)と合計を示した。Bはその他の本について同様に合計冊数(人数)のみ示した。ABの合計でみると養護コース学生の総計冊数は栄養コースの2倍あった(61:33)。Aについては11種のうち過半数は、2004年全国書店調査のベストテン(A*)⁽¹⁾と重複していたが、両コースの傾向は異なっていた。栄養コースの学生では、Aの合計人数の8割は、全国のベストテンに入る本に興味を持っているが、養護コー

スではAの合計人数の半数のみにとどまっていた。養護コースの学生の方が独自の読書傾向にあり、本のテーマとしては両コースに共通な、愛と病・死の他に、虐待・非行などがあるのが特徴的である。

4) 母と娘の生きる目的(表5)

表5は生きる目的について学生に質問した結果である。条件を4種類に分け①一般的に考えた場合、②自分が母に望む場合、③自分自身に望む場合、④母が自分に対して望む場合、の①から④までのそれぞれの場合に生きる目的として望む事柄を、以下に設定した(1)から(8)までの項目から選択させた。それは、(1)社会への役立ち(2)職業(3)経済力をつける(4)信念を貫く(5)高い地位を得る(6)趣味

表5 生きる目的として何を望むか

対象数	①		②		③		④		⑤	
	一般的に	養護 栄養	母に対し	養護 栄養	自分に	養護 栄養	母が自分に	養護 栄養	働く目的	養護 栄養
	63	64	63	64	63	64	63	64	63	64
1 社会役立	13	13	6	6	7	10	4	17	5	12
2 職業人	10	9	2	2	4	3	2	6	2	5
3 経済	17	13	9	8	4	9	10	13	24	27
4 信念	15.5	10	4	2	6	5	5	9	5	5
5 地位	4	4	1	2	1	5	1	2	1	1
6 趣味	8	11	3	3	2	12	2	2	2	4
7 楽しみ	8	10	2	1	3	8	0	2	2	5
8 家庭	13	11	8	9	10	17	2	12	0	4
計	88.5	81	35	33	37	69	26	63	41	63

表6 母と職業

コース 対象数	養護 63	100%	栄養 64	100%	計 127	100%
I 職業について母との関係						
1 A 今まで母と進路、職業について話した	48	76%	58	91%	106	83%
B 母と話さないがなんとなくわかる	4	6%	9	14%	13	10%
計	52	83%	67	105%	119	94%
B/A	0.08		0.16		0.12	
2 A この職業選択について母と相談	27	43%	39	61%	66	52%
B この職業を母に薦められた	11	17%	26	41%	37	29%
計	38		65		103	
B/A	0.41		0.67		0.56	
3 母と同じ性格でこの職業に向いている	19	30%	24	38%	43	34%
4 A 母が関連職業	11	17%	5	8%	16	13%
B 母が同じ職業	2	3%	1	2%	3	2%
計	13	21%	6	9%	19	15%
B/A	0.18		0.20		0.18	
5 A 母のようになりたい	17.5	28%	18.5	29%	36	28%
B 母と同じは嫌だ	13	21%	20	31%	33	26%
計	30.5	48%	38.5	60%	69	54%
B/A	0.74		1.08		0.92	
6 A 自立の為職業を持つよう母にいわれていた	8	13%	12	19%	20	15%
B いわれないうちが母が思っていると感じていた	8	13%	15.5	24%	23.5	19%
計	16	25%	27.5	43%	43.5	33%
B/A	1.00		1.29		1.15	
II 仕事観						
1 女性も仕事を持つべきだと思う	30.5	48%	45	70%	75.5	59%
2 結婚しても仕事は続ける	28	44%	40	63%	68	54%
3 子供が出来ても仕事は続ける	21.5	34%	29	45%	50.5	40%

* どちらともいえない、中間の場合は0.5とした。

(7) 楽しみを追う (8) 家庭を大切にすること、の8項目である。これらの項目は文献の先行研究⁽²⁾を参考にした。また⑤働く目的を何とするか、についても同様にして、結果を集計した。8項目以外の場合は自由記述欄に記入させた。両コースの①から④までについて、8項目の中で多いものから順にあげると、前半は、経済力、社会への役立ち、家庭、信念、後半は、趣味、職業、楽しみ、となっており、高い地位を望むものは最も少ない。②から④までを比較すると、母には、家庭を大切にすることと、経済力をつけることの両立を望んでいるが、自分自身には良き家庭人を望んでいることがわかる。双方とも、働くのは、母が望む通り経済力のためである。全体として養護コースより栄養コースの学生の方が生きる目的が明確で、仕事にも家庭にも意欲的である。栄養コースの学生は、社会に役立ちながら家庭を大事にする事を、母からも期待され(④の項目1と8の合計29名で1-8の総計63名)、自

分もそれに答えようとしていて(③の項目1と8の合計27名で1-8の総計69名)、母との関係が密な学生が比較的多いことを示唆している。反対に養護コースは、この結果から見る限り、自分自身も期するところがなく(③の1と8の合計17名、1-8の総計37名)、母からも期待は余りされておらず(④の1と8の合計6名、1-8の総計26名)、生きる意味が見出しにくい学生が比較的多い(③と④の総計が少ない)ように思われる。特に母は娘に対して、社会への役立ちや家庭人を求めていると、学生が感じている場合が多いことは、栄養コースとの大きな違いである。

5) 母と職業 (表6)

I. 職業についての母と娘の関係

さらに、より具体的に母と娘との関係を調べてみた結果が表6のI(職業について母との関係)である。質問にどちらとも言えない場合は0.5として合計してい

る。栄養コースでは、進路について母と話した事がある学生（1 A）は91%、話さなくてもわかるものは（1 B）14%、この職業選択に際し母と相談したものは（2 A）61%、薦められたのは（2 B）41%であった。それに対して養護コースでは、それぞれ順に1 A - 76%、1 B - 6%、2 A - 43%、2 B - 17%であって、全てにおいて栄養コースより低い。逆に母が関連職業であるのは（4 A）養護コースの方が21%と多い。また、母と同じになりたい者（5 A）の率は両コースとも約30%と同じであるが、栄養コースでは母と同じでは嫌だ（5 B）という者が31%と多い。両者の合計（項目5 AB）でみると、反発もふくめて関係が密なのは栄養コースで60%あるが、養護コースでは48%にとどまる。仕事を持って自立すべきとは余り言われず（6 A）、自立すべきだと言われるのは両コースで1 - 2割に過ぎないが、言われなくても母がそう思っている（6 B）、と感じているのは、同数以上あり特に栄養コースの学生では多く24%にのぼり、6 AB合計で43%となる。以上項目4以外の全てにおいて、栄養コースのほうが高い率で、母との関係が密であるといえる。

II. 仕事観（表6のII）

女性も仕事を持つべきだと思うのは、栄養コースの学生で70%、結婚しても続けるのは63%、出産しても仕事を続けるのは45%である。それに対し養護コースでは各々48、44、34%と低い。長いライフスパンで働く事に決意をもっているのは、全体として栄養コースの学生の方に多い。

考 察

本調査の結果から見る限り、全体の傾向としては、養護コースの学生は、栄養コースより母との関係が弱いように思われる。また養護コースでは「仕事を持つべきだ」と思う学生の割合と、子育てと両立したい」とする学生の割合も低い。また懐疑的なのか、自分にとっての生きる意味を見出しにくいように思われる。にもかかわらず養護教諭への平均志望度が一貫して高いことから推測すると、むしろその様な傾向が養護教諭の道へと導いた可能性もある。逆に栄養コースは、養護コースより母との関係は密で、生きる意味を見出し、仕事や家庭を大切に肯定的積極性があるように思われる。2002年の経済企画庁の調査⁽³⁾では、子育てと仕事を両立させたいと思う女性の割合は、20代（208人）では41%となっているが、この値は今回の栄養コースの45%に近い。また、同調査において学生・無職（248人）では30%となっているが、この値は今

回の養護コースの34%に近い。栄養コースの方が、学生意識を抜けて有職者の意識に近く、高いといえる。

それでは、母親の世代では、どうだったのだろうか。1975年の総理府の調査⁽⁴⁾によれば、子育てと仕事を両立したいものは、女性全体（約16000人対象）では11%、大卒（約1200人対象）では15%であった。この点では30年間で意識が高まったようだが、1975年の上記調査では「何らかの条件で女性も仕事をした方が良い」とするのは、女性全体で80%、大卒で90%であった。今回は養護コースで48%、栄養コースで70%であったことからすると、意識が高まったとは言い難い。むしろ母が娘に望むより、娘が自分自身に望むことの方が、安易な方に流れているようにも思える。このことが最近のニート増加の背景にあるかもしれない。今回の調査で職業志望時期は小・中学校までで2割、高校1年までで3割なので、早期に職業選択のための教育をすることも効果があるように思える。

しかし、それは対処療法的なことである。問題の本質は、実はもっと深いところにあるのではないか。神谷は⁽⁵⁾キルケゴールの言葉「女は生きる喜びなのだ」を引用し、何気ない日常で生きることそのものを楽しむ状態を、女性の生きがいの典型としている。これまでの結果からみると、栄養士コースでは特に、そのようなタイプの学生が多いといえるかもしれない。養護コース学生の母が娘に望むのは、経済力である。一方、娘が自身に望むのは、家庭、社会貢献、信念である。これに対し、栄養コース学生の母が娘に望むのは、社会貢献と経済力である。一方、娘が自身に望むのは家庭と趣味である。これを、娘たちが母に比べて身勝手に安易に流れている、とするのは皮相な見方であろう。戦後10年から25年までの15年間に実際、大卒女性が娘に期待する生き方は、経済・社会貢献から自己の信念と趣味・教養に完全にシフトしていたとする報告がある。すなわち前者の経済・社会貢献は37%から16%へ減少し、後者の自己の信念と趣味・教養は40%から70%へと増加したのである⁽⁶⁾。自分たちができなかった、いわゆるバランスの取れた個人志向を娘に求めたというのである。それから25年経ち、実際に、かつて母達が望んだようになったということなのだろうか。

神谷⁽⁷⁾は生きがいの分類として①生存充実感（審美、遊び、趣味、日常生活）②変化と成長（学問・冒険）③未来性（夢／野心）④反響（愛、名誉、服従、奉仕）⑤自由⑥自己実現（個性、創造）⑦意味（使命、報恩、孝行、信仰）の7項目をあげている。またマズロー⁽⁸⁾は人間の動機を①生理的欲求②安全の欲求③所属と愛の欲求④承認の欲求⑤自己実現の欲求⑥知る

欲求と理解する欲求⑦美的欲求に分類しているが、個々の動因を切り離し、リスト化することには批判的で、低次から高次の欲求に進むような階層性があるとしている。今回の設問は、比較のため文献の先行研究・調査⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾を踏襲したのであるが、上記のような木目細かい生きがい観・動機を視野に入れる必要がある。そのような点からみると、今回の結果にみられる娘世代の特徴を、単に若者の労働意欲低下の問題として、済ませてしまう訳にはいかないだろう。

フロム⁽¹¹⁾は欲求には主観的定義と客観的規範的定義の二つの立場があるとした。すなわち第一の立場は欲求の満足を求め、その影響を問題にしない。第二の立場は欲求が人間を成長と良き生へ促がすかを問題にする。彼は、「第一の立場が全面的に支持されている今日、第二の立場こそ重要である。」とした。今回のアンケートは、この価値判断を含めて描出する意図があったが、何の為に生きるかという、この大きいテーマに対して、設問分類が不十分な事は否めない。

فرانクル⁽¹²⁾によれば、1969年米国における48大学の学生約8000人の調査では、7-8割前後の学生が「人生の意味を見出す事」を人生の第一目的とし、「お金儲け」としたものは16%のみであったという。またミシガン大学による労働者約1500人対象の調査では仕事の重要面として「収入」は5番目であった。一方、1973年に実施されたポーランドの青年対象の調査では、7-8割が「生活水準を向上させるため」としたという。本調査では養護、栄養、両コース共、表6③の〈自分自身に対して生きる目的〉を「経済」とする割合は4番目であり、上記の1969年の米国のデータに近い。しかし⑤の〈働く目的〉の合計で見ると「経済」は他を引き離す第1位で、養護コースの学生では特に多く6割に上る。この点では上記の1973年のポーランド青年に相当する。しかし①から④までの〈生きる目的〉では養護、栄養、両コースともに「経済」「社会」「家庭」が共に多く、養護コースでは、さらに「信念」が多い傾向である。「経済」が特に多いわけではなくこれらの傾向は、前述した文献例の1969年の米国の学生に相当する。今回の調査では、仕事の目的は経済であるが、生きる目的としては、自己の信念、家庭、趣味、などの多様な価値観がみられる一方、無回答も多い。但し生きる目的を単純ないくつかの言葉で選択するアンケートに限界はあり、回答率が低かったのは、これが影響している可能性はある。(選択肢以外にその他として自由記述欄も設けていたが)養護コースに特にみられた「生きる意味を見出しにくい」という傾向にも、この設問の範囲内で、という但し書きは必要であ

ろう。

フランクル⁽¹³⁾はマズローの階層性には批判的で、自らの体験から、低次の欲求が満たされない極限状態でこそ、高次の欲求が差し迫ったものになるとした。また彼は「今日活動主義の前提は懐疑的悲観主義であり、信じて身を任せる進歩が無く、個人の内面の進歩しかないという現実がある」⁽¹⁴⁾と述べた。養護コースで見られるような、懐疑的で生きる意味を見出しにくく、社会参加に消極的なのは、むしろ現代社会に鋭敏な感受性を持っているからではないかとも考えられる。

フランクル⁽¹⁵⁾は、「マズローらの唱える動機理論では、人間を刺激に対して「反応」する存在か、衝動を「解放」する存在ととらえる。しかし、本来人間のしているのは、人生が問いかけてくるものに「応答」することである」とした。また、フランクルと同様、強制収容所での極限の経験を持つアーレント⁽¹⁶⁾は、人間の条件としてあげた労働、仕事、活動、のうち「活動」を重視している。

養護教諭の存在はまさにこの「応答」そのものであり、「活動」にほかならない。彼女達は、この応答や活動を通じて無意味観を克服しようとしているようにも思われる。そうであるならば、たとえ当初の志望が変更されても、今後の進むべき道は自ずと開かれる事であろう。入学当初の志望度が、現実を知ることで減少するのは、一般的に起こりうることではあるが、その原因を見極め本人の価値観や真の希望を汲み取った上で、入学後の個別の進路指導が非常に重要となる。また高校までの進路指導に、現状認識を高める工夫が必要なのはいうまでもない。今回の調査結果から両コースの学生の特徴がみられたが、これはコース別にアンケートをしているので、記入した際の時間や環境などの条件が厳密に同一ではない。そのことでバイアスが入った可能性は否定できない。今回コース別に比較することで対照的な傾向を見てきたが、単に優劣を言うのではなく個性として捉えるべきである。今回の調査結果だけで先入観を持つてしまうことは避けなければならないが、本学の学生の人生観、職業観の一端をとらえることはできたのではないか。今後日常の学生指導や教育と学校運営にあたっての議論に参考になればと考えるものである。

謝 辞

拙文執筆へのきっかけのみならず、コメントまで下さいました佐島群巳先生に御礼申し上げます。またこれはアンケートに協力してくれた学生ばかりでなく、日々学校運営に尽力なさっている方々あってこそ生ま

れたものです。国際婦人年から30年の今年は、私事ながら筆者の職業歴とも重なります。この節目の年に、初めてこのような論文を書く機会を与えられたことを感謝しています。

文献

- 1) 朝日新聞 2004年12月26日付日刊一読書「2004年ベストセラーこの一年」
- 2) 吉田昇、神田道子、編 現代女性の意識と生活 日本放送協会 1980 pp.136
- 3) 女性と男性に関するデータベース <http://winet.nwec.jp/toukei/save>
- 4) 前掲書(2)
- 5) 神谷美恵子 精神医学研究1 みすず書房1981 pp.153
- 6) 前掲書(2)
- 7) 神谷美恵子 生きがいについて みすず書房 1980
- 8) AH Maslow, *Motivation and Personality*, Harper & Row, 1954 (邦訳 A・H・マズロー著 小口忠彦 監訳 人間性の心理学 産業能率短期大学出版部 1971)
- 9) 前掲書(2)
- 10) 前掲書(3)
- 11) Erich From, *The Art of Being*, (邦訳エーリッヒ・フロム著 小此木啓吾 監訳 堀江宗正 訳 よりよく生きるということ 第三文明社 2000年 pp.28-44)
- 12) Viktor, Emil. Frankl, *The Unheard Cry for Meaning: Psychotherapy and Humanism*, Simon and Schuster, 1978 (邦訳ヴィクトール・エミール・フランクル著 諸富祥彦監訳 生きる意味を求めて 春秋社 1999年 pp.33-41)
- 13) 前掲書(12)
- 14) Viktor, Emil. Frankl, *Die Sinnfrage in der Psychotherapie*, R. Piper, Munchen, 1981. (邦訳 V・E・フランクル著 山田邦男・松田美佳 訳 それでも人生にイエスという 春秋社 1993年 pp.9)
- 15) 前掲書(12)
- 16) Hannah, Arendt, *The Human Condition*, University of Chicago Press, 1958 (ハンナ・アーレント著 志水速雄 訳 人間の条件 筑摩書房 1994年 pp.290、409)